

富永神社祭礼奉納

とき 平成十年十月九日(金)
午後四時四十五分始
ところ 富永神社 能楽殿

能組

七騎落 島考三郎
小袖曾我 平野阿裕美
猩猩 佐野仁美

老松 今泉友美
猩猩 山敬子

狂言 重喜 新登巻 柳 早裕美

住持 伊藤麻依
後見 佐野元之助
地謡 天野雅夫
中野伸一
水谷至男

5:15分頃

仕舞 国舟 村木岳史
仕舞 船弁慶 中嶋薫
仕舞 大蟬江丸 今泉孝子
谷野充千帆

囃子 鞍馬天狗 大鼓 清水俊典 中嶋慎
小鼓 森田收 笛 酒井淑規

5:35分頃

仕舞 俊成忠度 岩崎葉子
高野物狂 本田野子
山姥 佐野菊代

連管 下り端 加藤貢
太田研司
今泉英三
酒井淑規

狂言 佐渡狐 佐渡の百姓 大原正巳
越後の百姓 安形忠久
奏者 酒井宏
後見 中山伸一

5:55分頃

(休憩 三十分)

7:00分頃

半能 養 シテ 中嶋 康夫

ワキ 太田 研司

大鼓 河村 真之助

太鼓 鹿取 希世

7:25分頃

狂言 空

腕

太郎冠者 畑 中良雄

主人 佐野 元之助

後見 大原 正巳

8:05分頃

連調 草紙洗小町

高林 白牛口二
高林 呻二

大鼓 河村 真之助
小鼓 鈴木 芳子
水谷 麻朱子
永田 聡子
苗 鹿取 希世

8:20分頃

狂言 六地蔵

スツバ 権田 重紘
田舎者 天野 雅夫

スツバ 加藤 賢一
スツバ 水谷 至男
スツバ 小澤 貞博
後見 中山 伸一
酒井 宏

8:55分頃

能 羽衣 シテ 今泉 英三

ワキ 竹内 三郎

大鼓 河村 真之助

大鼓 中嶋 康夫
小鼓 永田 六兵衛
加藤 貢

後見 鈴木 肇

地謡 竹内 省吾
田中 洋二
森田 崇史
鈴木 崇史
高林 白牛口二
弘

附 祝言

(終了予定九時五十分頃)

主催 本町区

あらすじ

狂言 重喜

法事に招かれた住持が、さつそく出かけようとするが、あいにく頭の毛を剃る者がいない。しかたなく新發意の重喜に頭の毛を剃らせることにして「弟子七尺去って師の影を踏まず」と教えます。そこで重喜は、住持から遠く離れ、長い棒の先に剃刀をつけて剃りはじめ、ついに鼻を……。

狂言 佐渡狐

年貢を納めに上京する佐渡の国の百姓と越後の国の百姓は、佐渡に狐がいるかいないかで争いになり、刀を賭けることに。領主の館の奏者に判定をまかせることになるが、狐を見たこともない佐渡の百姓は、奏者に袖の下を渡して狐がいることにして欲しいと頼み、狐の特徴を教えてもらうが、鳴き声について聞かなかつたばかりに……。

半能 養老

頃は初夏、美濃国（岐阜県）本巢の郡に霊水が湧き出るといふ報告があつたので、雄略天皇の勅命を受けて、勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人の樵夫が、来かかります。勅使は、これこそ話に聞く養老の親子であろうと思つて尋ねると、果たしてそうでした。老人は、問われるままに、養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。ついで老人は、勅使をその滝壺に案内し、霊泉をほめ、更に他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使は、感涙を流し、この由を奏聞しようと帰洛しかけると、にわかに天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。〈中入〉そこへ、所の者が出て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで、若返りの様を見せます。ついで、養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であつて、時として神と現じ仏と現れ給うのであると述べます。そして峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を奏し、泰平の世を祝福して、神の国へと帰つてゆきます。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。

狂言 空腕

主人に淀へ鯉を求めに行くよう命じられた太郎冠者は、用心のため主人の太刀を借りて出かける。日が暮れてきたので、憶病な太郎冠者は恐ろしくてしかたがない。物影を追剥と勘違いして太刀までさしだしてしまふ。様子をみるためあとを追つてきた主人は、怒つて太郎冠者を打ち、太刀をとりあげて帰宅する。気絶から目が覚めて太刀がないのに気づき帰宅した太郎冠者は、主人に武勇談をでつち上げて語る。主人は感心して聞いているふりをして、太郎冠者の目の前に太刀を突きつけて……。

狂言

ろくじぞう
六地藏

今生後生のため六地藏堂を作りました。そこで安置する地藏を仏師に頼もうと田舎者は、都へ上ります。都に着いたが、仏師の居所を知らない。そこで大声をあげて仏師を尋ねます。これを聞いた都のスツパ（詐欺師）が親切に声をかけ、事情を聞き、自分こそが真仏師であると名乗り、明日の今時分迄に六地藏を作ってやろうと約束します。仲間三人とかたらい、三人づつ二度に分けて地藏に化けて田舎者をだますことにする。そこで……………。

能

羽衣 はごろも

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍はくりゅうという漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂がするので、あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に、美しい衣が掛つています。家の宝にでもしようと、持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分ものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとします。天人は、羽衣がなくて天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着し、月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色を賛えた——後の世に「駿河舞」として伝えられる舞をまいながら、天空へと上ってゆきます。